

【143】

氏名	水口俊助
	みずぐちしゅんすけ
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第158号
学位授与の日付	昭和39年12月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	顎骨の創傷治癒に関する実験組織学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 堀井五十雄 教授 西村秀雄 教授 岡本道雄

論文内容の要旨

著者は生後2.5月～3.5月の幼犬を実験材料にえらび、その下顎骨の歯槽外板を撤去して同部に発育中の前臼歯歯胚を摘出し、顎骨に大きな損傷を与え、これがどのような経過をたどって修復されるかを組織学的に研究し、また同部に植立する乳歯が、どのような生物学的態度を示すかを実験的に検索して次のような結果を得た。

- 1) 発育中の歯胚を摘出した顎骨体の欠損部は周囲より急速に新生する幼若肉芽組織によって填塞され、これが日時の経過とともに漸次線維成分に富む陳旧な肉芽組織に変じ、実験後18～20日間頃になると摘出窩の全体は陳旧肉芽組織をもって充たされる。
- 2) また周辺部の顎骨骨梁よりは繊細な骨質の新生をきたすとともに、陳旧肉芽組織内にもこの幼若細な骨質が形成され、これらが漸次纏絡し、5～6週間経過すると摘出損傷部は網眼状を呈する新生骨によって修復される。
- 3) 摘出窩内を充填する繊細な骨質は不規則ながらも中央部を基点としてほぼ放線状に配列している。
- 4) しかしこのような骨質は日時の経過とともに強固となり、また一部のものはさらに吸収されて骨質の改造現象が営まれ、遂に永久歯部における顎骨骨梁とほぼ同様の配列像を示すにいたる。
- 5) 切除された歯槽外板部においても、まず骨壁の断端部付近より造骨現象が開始され、これが繊維性結合織内に新生する骨質と相連らなり、術後ほぼ8週間を経過すれば、欠損歯槽外板部には一層の緻密骨質が形成される。
- 6) 歯胚を摘出した顎骨損傷部を、抜歯窩に比較するとその創面は頗る大きいにもかかわらず治癒機転は極めて速やかに進行し、いかに発育中の幼犬顎骨が旺盛な修復機能を有しているかがわかる。
- 7) 切除された歯槽外板の対向側である舌側よりは下顎骨底部にそって急速に構成される新生質層が本来の緻密骨質層よりも、むしろ厚層をなし、しかもこれが短期間に添加されて咬合力に対応し、顎骨体を補強しようとする生物学的態度を示すのである。

8) 下顎管壁が損傷をこうむった場合は速やかに神経、脈管の周囲に骨質の新生を来たして管壁を修復し、内容物の保護機転を示すのである。

9) 後続永久歯歯胚を摘出しても同部に残存する乳歯歯根の吸収現象は依然として継続されるが、正規のものに比較すればその速度ははなはだ緩慢である。

10) 以上のことより、乳歯歯根の生理的吸収に対し、後続永久歯歯胚の存在が大きな役割を演ずることは疑いのない事実である。

11) この反面乳歯の歯根尖を著しく損傷した場合にも活発な吸収現象の発現を認めるが、これは正常なものとは考えられず、むしろ異物排除機転による吸収とみるべきである。

12) また乳歯歯髄が固有組織像を失った場合、髄腔側よりの吸収現象は営まれないのである。

このことは乳歯の歯根吸収に対し乳歯歯髄が、いかに重要な機能を有しているかが理解されたのである。

論文審査の結果の要旨

生後2～3か月の幼犬15例について、その歯槽外板を除去し、さらに前臼歯歯胚を摘出し、その創傷の修復機転、とくに同部に植立する乳歯に対する影響を検した研究である。

創傷軟部および骨質の修復はその部に生ずる肉芽組織および周囲骨組織からはじまる新生、吸収、改造などによって、ほぼ正常の構造、配列を示す骨質の新生をみるが、一般に歯胚摘出巣は抜歯巣よりもその修復がいちじるしくはやい。

また後続永久歯歯胚を摘出した場合の乳歯歯根の吸収は遅延すること、乳歯歯根尖を損傷した場合の吸収現象は異物排除機転とみなすべきもので、正常の歯根吸収機転とことなっただ点のあること、歯髄組織に損傷がおよんで、歯髄組織がその固有組織像をうしなっただあいは、髄腔側からの吸収現象はいとなまれないことを実証した。

これによって歯根吸収に対する歯胚発育の影響、および歯根吸収に対する歯髄の影響などの生物学的特性を明らかにし得た。

本論文は学術上有益にして医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。